ZOCALO 2026 1 ▸ 3

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

【主な記事】

企画展「コレクションの舞台裏」関連特集
光をあてる、掘りおこす。収蔵品をめぐる7つの試み

アーティスト・プロジェクト#2.09 江頭誠 関連特集
浦和PARCOとの連携事業「PARCO ART & CULTURE DAYS」

MUSEUM NEWS 2026.1 ▷ 2026.3

ミュージアムショップおすすめ商品

MOMASコレクション 関連コラム
MOMASのゆるい絵・素朴な絵

「MOMASのとびら」夏休み拡大版 サマー・アドベンチャー 関連コラム
丸シールで広がる創造の世界

アトリエの田中保（シアトル時代）Courtesy of Hélène and Claude Garache Endowment Fund.

光をあてる、掘りおこす。収蔵品をめぐる7つの試み

企画展「コレクションの舞台裏」
2026年2月7日（土）～ 5月10日（日）

1982年に開館した埼玉県立近代美術館は、継続的な収集活動により、現在4,000点以上の作品を収蔵しています。「コレクションの舞台裏―光をあてる、掘りおこす。収蔵品をめぐる7つの試み」は、当館の学芸部スタッフがそれぞれの視点で収蔵品から作品を選び、7つのテーマを設定し、調査研究（リサーチ）の成果をもとに展示する展覧会です。開幕に向けて準備中の学芸室から、ここではいち早く、2つのテーマをご紹介します。

キスリングとアンドレ・ドラン ―来歴をめぐって

キスリング《リタ・ヴァン・リアの肖像》
1927年、油彩・カンヴァス

アンドレ・ドラン《浴女》1925年
油彩・カンヴァス

当館は、開館当初からキスリングの2点の絵画《リタ・ヴァン・リアの肖像》と《赤いテーブルの上の果実》、およびアンドレ・ドランの絵画《浴女》を収蔵しています。この3点はいわば「名品」として、MOMASコレクションの「セレクション」コーナーで展示する機会も多く、ご覧になったことがある方もいらっしゃるでしょう。

キスリング（1891-1953）はポーランドのユダヤ人家庭に生まれ、19歳でパリに出て、エコール・ド・パリを代表する画家として活躍しました。一方、フランスに生まれたアンドレ・ドラン（1880-1954）は、20世紀初頭にフォーヴィスム運動に携わりますが、1920年代にはフランスの伝統に根差した古典主義的な表現を探求するようになります。20世紀前半のフランスを中心に活動した2人の間には交流があり、1921年には南仏のサナリー＝シュル＝メールに滞在して、ともに制作を行っています。

ところで《リタ・ヴァン・リアの肖像》は、キスリングがパリの画商の妻を描いた作品ですが、興味深いことにドランも1929年から30年頃に同じ人物を繰り返し描いています。今回の展示では、作品の来歴（所蔵者の変遷）や作品にまつわる当時の雑誌記事などから、2人の画家と画商やコレクターとの関わりを紹介し、「名品」が当館に収蔵されるまでに辿った経緯や作品の背景にある物語をご紹介したいと考えています。

田中保、アトリエへの招待 ―パリの新発見資料から

田中保と猫（シアトル時代）
Courtesy of Hélène and Claude Garache Endowment Fund.

パリから驚くべき知らせが舞い込んだのは2024年夏のことでした。県ゆかりの画家、田中保（たなか やすし）（1886-1941）がかつて暮らしたアトリエで、未知の関連資料がまとまって発見されたというのです。田中は岩槻に生まれ、18歳で単身渡米、その後フランスに移り、サロンを中心に作品を発表しました。一度も帰国せずに亡くなったため、その生涯には不明な点も多くあります。そんな中、2022年に開催した回顧展「シアトル→パリ　田中保とその時代」から数年を経て、思いがけず新たな研究の扉が開いたのでした。

2025年6月、公益財団法人 遠山記念館の助成によりパリを訪れました。田中のアトリエは、20世紀前半にパリの芸術的中心となったモンパルナスの一角にあります。門を入り、細い通路を抜けると、時が止まったような中庭が現れました。その中庭に面した天井の高いアトリエは、田中が生きた時代の面影を残していました。

発見された資料には、日本の家族からの手紙、アメリカ人の妻ルイーズ・カンと結婚前に交わした手紙、スケッチ、作品写真などが含まれていました。一枚一枚めくっていくと、田中の生涯の知られざる部分に少しずつ光が差していくようでした。今回の展示は、調査でわかったことをいち早く紹介しつつ、田中の暮らしぶりが伝わるようなものにしたいと考えています。

以上の2つのテーマに加えて、この展覧会では「山口敏男、岩﨑勝平、末松正樹の水彩と素描 ―戦時美術の一断面」、「点を打つ ―村上善男の美術と研究」、「細田竹 ―日常を描く」、「女性たちの小宇宙 ―田中田鶴子、草間彌生、奥山民枝」、「MOMASのとびらを開いてみたら」の5つのテーマによる展示を予定しています。各々の学芸部スタッフが独自に設定したテーマのなかには、戦時下の美術、女性作家の活動の検証といった今日的な視座に立つ内容もみられます。作品自体は制作された時代から変わらずに存在していても、作品の解釈や見方は後の時代の価値観とともに変化していきます。それゆえ、この展覧会が既知の名品からあまり知られていない収蔵品にいたるまで、コレクションの魅力に現在の視点から光をあて、その新たな側面を掘りおこす機会になればと願っています。
(Y.T.／S.A.)

浦和PARCOとの連携事業「PARCO ART & CULTURE DAYS」

アーティスト・プロジェクト #2.09 江頭誠
「夢見る薔薇 ～Dreaming Rose～」
2026年2月7日（土）～ 5月10日（日）

企画展の枠を越え、現在活躍している作家を紹介する「アーティスト・プロジェクト#2.0」（以下A.P.）。2025年度は花柄の毛布を主な素材として制作する江頭誠を迎えます。来年2月のA.P.に先立ち、当館との連携事業として浦和PARCOで江頭さんの新作展示が行われました。今回はその会場の様子をお届けします。

今年の10月に開催された「PARCO ART & CULTURE DAYS」は、誰もが気軽に足を運ぶPARCOでアートの魅力を発信するイベントです。その一環として、浦和PARCOの1階センタースペースに江頭さんのインスタレーション作品が展示されました（10.10-19）。また、併設された「URAWA MUSEUM SPACE」のブースでは浦和区の美術館として当館とうらわ美術館が紹介され、中央の通路には雑貨などの出店も並ぶ賑やかな会場となりました。江頭さんの作品が設置された場所は、エントランスに入って右手側の吹き抜けとなっているホールで、上階からも見える好立地です。突然登場した花柄の群れに、来店された方々は目を奪われたことでしょう。通りがかる人が花柄毛布の懐かしさを話したり、毛布の装飾模様の中にレトロなもの―木彫りの熊や招き猫、ブラウン管テレビ、サンタの人形など― を見つけて足をとめている様子が印象的でした。

《忙しい夜》と名付けられたインスタレーションは、上京の際に母に持たされた花柄毛布を「ダサい」と友人に揶揄われ、その日の夜に悶々と悩んだという作家自身の経験がモチーフとなっています。友人の一言が心の中を忙しなく巡り、花柄となって現実世界にも侵食し、溢れ出ているのでしょうか。ベッドを中心に様々な日用品や家具を集合させ、その全てが毛布に包まれています。鮮やかな毛布に覆われて、質感や色が隠された既製品は、カモフラージュされたかのように遠目から個々を識別することは難しく、近付くことでようやくその輪郭が見えてきます。ベッドの中で目を見開くマネキンは、眠れぬほどに反芻し続けてしまう作家の性分を代弁しているのかもしれません。ロココ調とも称される装飾的な模様の毛布は戦後日本で流通し、どの家庭でも見られるものでした。親から子へと渡り使い続けられる寝具は、それ自体が気配を纏うものです。花柄という有機的な装飾性が持つ視覚的なインパクトと人の気配が絡み合い、江頭さんのインスタレーションは増殖し拡大していきます。

今年は東京や大阪での個展のほか、「BIWAKOビエンナーレ」への参加、国外のグループ展など作品発表を精力的に続けている江頭さん。2026年2月から始まるA.P.は、作家が毛布という素材にあらためて立ち返る機会として「夢見る薔薇 ～Dreaming Rose～（ゆめみるばら ドリーミングローズ）」と題し、新たなインスタレーションを構想中です。皆さまどうぞお楽しみに！（S.Y.）

掲載協力：浦和PARCO

江頭 誠（えがしら まこと）
1986年三重県出身。2011年多摩美術大学美術学部彫刻学科卒業。2025年「キャッチ＆テイク」Otherwise Gallery、「おふとん遊泳」亀戸アートセンター、2024年「どこでもいっしょ～安心毛布 BIG ミニ四駆～」5450 THE GALLERYなど個展のほか、服飾やショーウィンドウのデザインなど幅広い活動を続けている。